碧南分所だより

2026年 1月号 NO73

新年を迎えて

分所長 髙木敏彦

新年あけましておめでとうございます。令和八年を迎えまして、改めて世界と日本の情勢をみてみますと戦争の終結、平和の到来ということがなかなか進まない様子が伺えます。お隣の中国との関係も仲良くゆくことを祈らざるを得ない日々です。

人型活動を通じて家族、友人、知人の倖せを祈って世界中の平和を祈りたいものです。

天災と人震

出口 王仁三郎

日本の国民は古来抱擁性に富み、世界の文化をことごとく吸収して同化し精錬してさらにより以上うるわしきものとしてこれを世界に頒与するところに日本人の生命があり、使命があり、権威があるのである。しかして緯（よこ）に世界文化を吸収してこれを精錬すればするほど、経（たて）に民族性が深めらるべきはずだのに、現代の日本は外来文化の暴風に吹きつけられるほど固有の民族性の特長を失いつつある状態は、あたかも根の枯れたる樹木に等しいものである。日本人は日本人として決していずれのものによっても冒されない天賦固有の文化的精神を持っておるのである。それが外来文化の浸食によって失われんとすることは、祖国の山河が黙視するに忍びざるところでなくてはならぬ。

かくのごとき時に際して天災地妖が忽（こつ）えんとして起こり国民に大なる警告と反省を促したことは今代にはじまったことでなく、実に建国以来の災変史が黙示するところの真理である。近くは元和、寛永、慶安、元禄、宝永、天明、安政、大正に起こった大地震と当時の世態人情との関係を回顧するも、けだし思い半ばに過ぐるものがあるではないか。

さて、わが国の記録に存するもののみにても大小一千有余の震災を数えることができる。その中で最も大地震と称されているものが、百二十三回、鎌倉時代のごときは平均五年目ごとに大地震があったのである。覇府（はふ）時代には、大小三十六回の震災があった。しかもわが国の発展がいつもこれらの地震に負うところが多いのも不思議な現象であるのだ。奈良が滅び、京都が衰え、そして江戸が発展した歴史の過程をたどってみれば、その間の消息がよくうかがわれるのである。

全体わが国の文化そのものはまったく地震から咲き出した花のようにも思われる。天祖、国祖の大神のわが国を見捨てたまわぬかぎり、国民の生活が固定して、腐敗堕落の極に達したたびごとに地震の浄化が惚（こつ）えんと見舞って来て一切の汚穢を洗滌（せんでき）するのは、神国の神国たるゆえんである。

古語に『小人をして天下を治めしむれば天禄永く絶えむ、国家混乱すれば、天災地妖臻（いた）る』とあるのは、自然と人生の一体たることを語ったものである。人間が堕落して奢侈淫逸に流れたときは、自然なる母は、その覚醒を促すために諸種の災害を下したまうのであった。しかも地震はその極罰である。

わが国に地震の多いのも、神の寵児なるが故である。自然否天神地祇の恩寵を被ることの多いだけ、それだけにその恩寵に背いたときの懲罰は、一層激しい道理である。もし地震が起こらなければ人震が起こってその忿怒（ふんど）を漏らすに至る。近くは天草四郎や由井民部之介、大塩平八郎ないし西郷隆盛のごとき、皆この人震に属するものである。

「惟神の道」より

主な行事予定

一月一日(月)　午前九時より
碧南分所元旦祭
三河本苑新年祭　午前十一時より
一月十一日(日)　午後一時半より
碧南分所月次祭　担当第三班
一月一八日(日)　午前一〇時より
三河本苑月次祭　成人式・七草粥
一月二八日(水)
人型最終集約日　髙木宅まで

1月の誕生者 おめでとうございます！

鈴木 佐保乃 生田 実紗八日 生田 吉治 一四日 鈴木 紋子一八日 藤浦 ふじ子二〇日
安藤 香春二五日 久野 芳紀 坂野 唯三〇日